ルールを活かす

後進性排除（２）

飛躍の年はマンネリズムからはやって来ません。将来を見据えた策がうたれねばなりません。後進性を排する方策として「ルールを生かす」プレーに視点をあてることが必須課題です。

ルールの文言を知らなくてもプレーはできます。指示されたとおりやり、人の真似をすればよいのです。人のプレーを真似ることも進歩に役立ちますが、真似ているだけでは追い越せませんので工夫が始まります。マイナー日本がメジャーに追い着くには、それだけのルールの生かし方の研究によって、一歩先を歩む心が必要です。外国の真似だけで、最近流行でないとか、外国チームがあまりやらないと理由だけで、ルールを生かさないのは愚かなことです。ルールを正しく守るということは、その精神を具現することですが、さらに一歩進めてルールが志向しているゲームの進め方を先取りする心構えが必要です。そのことは、その一の、「日本に合ったラグビー」のなかの「身体をぶつけられることを少なくする」ということと共通することです。

kicking gameであるラグビーの前進の方法としてキックとドリブルは、前進効果だけでなく、ボールをもっていないプレヤーはタックルされないという基本ルールに基づいています。

スクラムは単なる押し合いではなく、ラグビー独特の equal condition のルールを基盤とした再開方法であるという基礎理解があれば、方法が見えてきます。目的を果たすために組方方やボールの出し方などについて、議論され工夫された変遷を重ねた歴史があります。

ボールを持って捕まらないためのフットワークやハンドオフの研究など留意されていないことがたくさんあります。

第 10 条の研究と活用によってプレーの変化とスピードをかえることができます。地上に寝ることがすくなくなり、ボールの展開が継続します。絶対的に否定されていた「地上に倒れてプレー」をしてもよいというルールの大革命がプレーに十分生かされていません。at once と immediately を直ちに訳されて、全く同一内容に認識されていますが、これも後進性を排せない一つの理由になっています。R.F.U にならってラボラトリーを創設し、ルールを始め用語やプレーの研究をすることも必須の課題です。

2005.12.29
西川　義行